

“老人と海”に出てくるカジキの種類について

鈴木治郎（旧遠洋水産研究所浮魚資源部長）

コロナで閉じこもり生活のような毎日の私は、何か本が読みたくなったものの、図書館にも行きづらい気がして、ネットで電子書籍の項目をちらちらと見ていたら、昔読んだヘミングウェイ（以下Hと書く）の“老人と海”（以下小説と書く）に出くわしたので、懐かしくなり購入して読み返してみた。マイアミ半島のはるか先にあるキーウエストで、かつてHの住んでいた家を見学したのは、ICCAT（大西洋マグロ類保存委員会）のSCRS（科学委員会）で大西洋のカジキ類に関するワークショップがマイアミで行われた時のことであった。今を去ること40数年も前のことである。ところで、“老人と海”を読んだり、昔この小説の洋画をみたりした時以来、登場するカジキの種類はなにであろうかとずっと気になっていた。このカジキについて、私なりの考えや、関連する事柄について若干の感慨も述べてみたい。

苦労したニシマカジキの資源評価

ここで、次の論議にもでてくるニシマカジキについて、その資源評価について少しだけ触れたい。カジキ類のワークショップの開催当時、延縄で多量に混獲されるカジキをめぐり、欧米のスポーツ漁業者からは、商業漁業によるカジキの漁獲を規制すべきであるという動きが活発化しつつあった。日本のマグロはえ縄漁業は、その当時は大西洋全域をほぼカバーして操業していた。また同時に、日本はカジキ類の最大の漁獲国でもあり、日本のマグロはえ縄統計が資源評価には必須であった。当時の資源評価では、ニシマカジキがすでに乱獲状態にあるのではないかという報告がなされていた。その後ニシマカジキの資源状態はさらに悪化し、カジキの漁獲を重視する米国等のスポーツ漁業とカジキは混獲種であるとする日本等の延縄漁業との対立を背景にカジキ類の資源評価会議で日米の研究者間で厳しい論議が続く、私にとっては苦労した思い出ばかりが残る種であった。なお、現在のニシマカジキの資源評価によると、本種の漁獲報告には、ラウンドスケールスピアフィッシュという別の魚種が混在していることがのちに判明しており現在もその問題を抱えているものの、長く厳しい漁獲規制によって、本種は乱獲状態を脱しつつあるようである。

小説に出てくるカジキの種類はなにか

さて、小説の原著の英文では、巨大カジキは、単に marlin(カジキ)としか書いておらず、種は特定されていない。ところが、そのカジキをマカジキとしている日本の論評等がいくつかあり、なぜそうしたのであろうかと興味がわいた。残念ながら、マカジキとした論評等では、なぜマカジキとしたかについての説明はされていない。大西洋には、大型になるカジキとしてニシマカジキとクロカジキの2種が分布している（ついでながら、メカジキは大西洋にも分布し、巨大になるが、英語では swordfish で、marlin とは言わない）。しかし、大西洋にはマカジキは分布しないので、科学的には、小説のカジキがマカジキということはあり得な

い。両種とも、小説に書かれているハバナの漁港に隣接するメキシコ湾でも多く漁獲される。ニシマカジキはインド太平洋に分布する大型になるマカジキとは異なり、ずっと小型で痩せている。しかし、小説に出てくるカジキの大きさは、1500 ポンド（約 650 kg）はあるだろうと H は、主人公の老漁師に言わしめている。これほどの巨大なニシマカジキは考えにくい。しかしながら H は趣味のカジキ釣りに精通しており、彼の頭の中には、どのカジキであったかのイメージがあったのではないかと思われる。巨大になるカジキとしては、クロカジキとシロカジキがあるが、シロカジキは大西洋には分布しない。とすると、老人の釣り上げたカジキはクロカジキしかないのではないかと私は想像している。

小説の“落ち“

この小説のすばらしさについて私ごときが言うことは何もないが、小説の最後には有名な“落ち”のような所がある。それは、ホテルから観光客の女性が、老人が漁獲してサメに食い荒らされ、その後港に放置されていた巨大カジキの残骸をみて、ホテルのボーイにあれは何かと質問する。ボーイは説明を始め、あれはサメ（tiburon, スペイン語）に…、と説明し始めたが英語でサメ（shark）と言い直した所で、その女性は早とちりをして、サメと思ってしまい、サメの尾びれがあんなに巨大で美しいとは思わなかったと言い、連れの男もそれに同意するところである。

波乱万丈の生涯を送った H の様々な思いとそれに対する世間の見方とのギャップが何とも皮肉にしかし的確に描かれている。この部分は、老年になった私が読み返してみて若いころ読んだ時よりずっと印象的であった。私にとって、マイアミは色々な悲喜こもごもの会議があった思い出深い所である。この“落ち”は読者が年を重ねていくほどにその心に響く感慨ではなかろうかと思う。